

仏女新聞

編集・発行 飯島可琳
平成二十九年十月一日

運慶を体験する

東京国立博物館で開催中の興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」に集まる運慶仏は、二十二体である。現存すると言われる運慶仏三十一体の七割にあたる。博物館によると、過去に例がない規模だそうだ。運慶が生きた時代にもなかった貴重な機会だ。

この展覧会に足を運び、安置されている仏像と展示の演出を堪能した。今回の特集は、観覧の第一報である。

興福寺北円堂

余白の大きな展示

第一会場の最後の展示室には、興福寺北円堂内部のかつてのすがたが再現されている。再現と言ってもあくまで仮説をもとにしたものだ。北円堂内の写真パネルを背にして立つ無著像と世親像をかこむ南円堂の四天王は、もともと北円堂に安置されていたと考えられているらしい。展示室のサイズも北円堂と同じくらいかと言え、そうではないようだ。

六体が安置される展示室の床面積は、北円堂よりかなり広く、天井の高さも八メートルあるという。東博で一番大きい展示空間だ。そこに、大きな仏像を安置するのではなく、大きく余白を配置したのはなぜか。





※パノラマ撮影です。

第一に、余白があると混雑に対応できる。運慶作の仏像が一箇所に集まる初の

試みだ。会場の混雑も想定以上だろう。

第二に、余白によって仏像の存在感が強調される。無によって有を際立たせるのは、日本文化の知恵ではなかったか。すぎ間なく安置されるより、強く一体一体の印象が残るはずだ。余白には何も無いのではなく、仏像が発する「気」が充満しているのではないかと考えれば、余白には意味があることになる。

展示会は、展示物が展示室におさまるだけで完成するわけではない。仏像を文化財として扱う展示空間で、仏像の宗教財としての魅力を引き出すためには余白が必要なのかもしれない。仏

像を引き立てる演出にも注目していただきたい。

三十三間堂 中尊光背

執金剛神の姿勢の謎

南北一二〇メートルの長大なお堂で知られる、京都の蓮華王院三十三間堂の中尊の光背には、三十三体の小さな仏像が飾られている。それらはTPOに応じた姿を変える千手観音を表現したものだそう。



うち三体が運慶の長男である湛慶の作品として展示

されている。(妙法院蔵)

左上の写真は展示されている三体のうちの一体、執金剛神だ。右手を振りかざし、こちらを威嚇するように口を大きく開ける。力強い執金剛神のイメージにぴったりの姿だ。しかし、疲れたのだろうか、膝の高さまであげた左足の裏を手で押さえている。そこにおかしみがある。足が疲れているのならそのまま降ろせばよいところを、手で支えてなんとか耐えているのだ。笑うのではなく、そうまでして姿勢を維持していることを尊ぶべきだろう。

中尊には四十二本の手があるため、三十三間堂内では光背の化身の存在を確

認することすらできない。そこにこれほど精巧な像を取り付けようとする心意気も尊い。「足を手で押さえた姿は湛慶の遊び心なのだろうか」くらいにしか結論づけられない自分もどかしい。しかし、その遊び心をつけることも私たちの役割なのではないか。

岡崎 瀧山寺

観音さまの晴れ着姿

寺外では初公開となる聖観音菩薩立像は、瀧山寺より上京スタイルで登場だ。

この展覧会のために、普段は外されている装飾を身に付けた。

装飾品をまとうだけでも、

かなり印象が変わる。照明が違うので白い肌にうつる影もお寺とは異なるし、横に大きく貼りだした宝冠で全身のバランスも変わる。お寺で見る姿とはまたちがう気品にあふれている。



初めての方も、瀧山寺にお参りに行ったことがあるという方も、展示室で晴れ

着姿と対面していただきたい。

聖観音菩薩の前に立つと、後世の修復による鮮やかな彩色や白い肌に目が惹きつけられる。そして、仏像そのものの形を見ることが忘れてしまいそうになる。運慶自身が今に伝えるのは形なのだが、印象に残るのは色だ。しかし、形を見失うのではないかと案ずることには照明を控えた展示室内では、白い肌だからこそ影がきれいに映える。迷い無い眉の輪郭や、頬や顎の起伏、衣のひだなど、運慶が彫った聖観音菩薩の形そのものが陰影としてくっきりと浮かび上がってくるのだ。

現代の私たちは色彩が落ちたり金箔が剥がれたりした仏像ばかり見ているので、鮮やかで金ぴかの仏像を見ると「何だこれは」と思ってしまう。しかし、運慶が生きていた時代には運慶作の極彩色の仏像や金色がまぶしい仏像が多くあったはずだ。人々はそうした仏像を見て、素晴らしい造形だと感じていたわけだ。色彩にまどわされる私は、たぶん修行が足りないのだろう。

京都 浄瑠璃寺伝来

十二神将頭上のお供

京都浄瑠璃寺伝来の十二神将は第二会場の最後の展示室に集められている。十



二神将が一室に会するのは
四十二年ぶりのことだ。
露出展示が圧倒的に多い
運慶展のなかで、十二神将
は全員が一体ずつアクリル

ケースにおさまっ
ている。展示室の碧
い壁に沿って整然
と並んだアクリル
ケースが反射しあ
うと、仏像の木のぬ
くもりとは対照的
な冷気が漂いはじ
める。ケースに閉じ
込められて並んだ
十二神将が、捧げら
れた十二本の氷柱
のようにみえた。
静粛な展示の雰
囲気とは逆に、十二
神将の動きは個性的だ。彼
らは薬師如来の眷属だが、
仏を警護しているようすに
はあまり見えない。CM撮
影に協力してもらっている
と錯覚しそうなくらいに、

よい意味で演技がかってい
る。

十二神将には干支の割り
振りがある。未年担当をの
ぞく十一体は頭上に干支が
乗っている。どれも、個性の
強い主人を指揮するかのよ
うに落ち着いて見える。卯
神(静嘉堂文庫美術館蔵)の
逆立った髪の毛から顔をの
ぞかせたうさぎのお尻が、
左の写真のように毛髪の背
後に大きくとびだしている。



ずり落ちてしまいそうで
はらはらするうさぎを、応
援しに行ってほしい。

記事中の写真は特別に許
可をいただいで撮影、掲載
しています。許可を下さり
ありがとうございます。

取材では、東京国立博物
館、法相宗大本山 興福寺、
朝日新聞社はじめ、皆さま
方のお世話になりました。
ありがとうございます。

興福寺中金堂再建記念
特別展 「運慶」

九月二十六日「火」く

十一月二十六日「日」

東京国立博物館 平成館
詳しくは公式サイト参照

<http://unkei2017.jp/>